

もひをしなければならぬ。

糧のない、餓えたものに對しては憐憫の眼を向けるものも、心のかはきに堪へかねて、あへぎ苦しむ者を見て、人は何と云ふだらう。

批判、誹謗、訓戒、あらゆる其當人とは關係のないむだごことが尤らしく並べられるのが此世の例とされて居るようである。

餓えたものには食を與へればよい。精神的に餓えたものには彼等の求めるものを與へない限り、どれほど批判して見た處が何の影響があるものであらう。それは餓えた人の前で、食品の講義を始めるのと同じ事である。

私達の心の糧は愛である。純なる愛である。

純な愛が、さうどこにも容易くころがつて居ない様に、心に惱みのあるものは、其求める糧をすらたやすくは得られはしない。

悩む人たちの前に私は只見過してゆかなければならない。

同情して、只黙過するより他はない、苦しいけれどもそれが世の中である。苦しい世の中である。

夫のある人が戀をした、といふ事をきくと貞淑な夫人方は、呆れた顔をして見せる。

其人達は、他を顧みる暇のないほど良人から可愛がられて居る仕合者が、でなければ、あり來りの愛に満足して居られる鈍感者か、もしくは、心の中では、左様した思ひ切つた事をして見たい慾望を持ち乍ら世間體に縛られて自らは決行し得ない不満を人の悪口でも云つて胡麻化さうとして居る人達である。

びつたりと、一つの心と心とが溶け合ふ様に愛し合つて、生活して居る人

達が、幾人あるものだらう。それなのに、男も女も年頃といふものになると一人の配偶を選んで同棲の生活を初めて極く少数者だけしか其數に洩れない。

一所に生活する男女を夫婦といつて居る。

随分間に合せな、可い加減な夫婦でも、子供が生れて、善良な父母となつて、働いて老いて死んでゆく。

考へて見ると不思議な様な事實である。

其不思議さを、時に打破る人があると、型にはまつた人達は大變に其人達だけが間違つた事をした様にさわぎ出す。さわぎ出す人の心に、間違つた事をしたといふ人達とどれだけの差があるものだらう。多くの場合批判者は被批判者よりは氣の狭い偽善者であるといひ度い。

「此子のために生きてます」と云ふ様な言葉は、女性の健氣な心のあらはれだとして誰にも首肯されて居る。

私には、でもそんな事は受けとれない。

今の私は「此子のために生きる」と云ふ世間の人の云ふ様な心持は一つもない。

私はやはり自分が一番かあひ。

だから、子供が無理な要求を私に持ち出す時などは、たまらなく厭になる事がある。

私は只はてしもない自由に憧れる女、事務的な凡の事を放擲したい女、それなのに私の過去の生活は、すっかり私の心持と正反對の途をたどつて、まるで性格の違ふ人と、自分の意志を押しつけた生活を送つて來た。

厭な事を我慢する習慣だけは完全に私に植えつけられた。そして、其代

りに得たものは過勞が生んだ私の一生の痼疾だつた。

今私は自由であり、暢びやかである。

でも、私の過去の苦しみを思ひ出させると云ふよりは、まだ繼續させなければならぬものは子供の性格である。

性格の異つた人と共に生活する苦しみは、其人にだけあてはまるものだと思つて居たのは間違ひだつた。左様した生活を送つたものは、又、それに似た子を育てなければならぬ苦しみを負はされるのだつた。

私は子を生まうとは思はなかつた。

そして子は生れようとも思はなかつた。

それなのに私を苦しめる我子が、私の傍に私を慕つて居る。

私は此子を時に深い「憎み」をもつて見る事がある。

それは只自分が可愛いからである。

私はそれほど苦しむ度くないからである。

私を苦しめるものは憎まなければならぬ。強く苦しめるものは強く憎まなければならぬ。

私は憎みながら、苦しむ乍ら、私の子を愛して居る。

私の子供は私を苦しめつゝ慕ひ追つて居る。

死ぬまで離れる事の出来ない親子といふ關係は、人間のあらゆる關係の中で一番悲惨なものである。

思ひ出のふるさと

其春、偶然にある用事で、永い間あこがれて居た生れ故郷の京都の地を踏んだ時、車の上から横切つた街々のけしきは、私の思ひ出の國とは遠く距つた感じのものだつた。

辻々に見る町の名の札は私にかすかに幼時の記憶を呼び起させてくれたけれども、それも只、私のなつかしがつて居た古い美しい、繪卷とは單獨に切り離された、一つの町、一つの辻といふ様な氣がした。

「こんな筈ではない。たしかに、もつともつと、私のまほろしの様な思ひ出をたしかめてくれる何かがある筈だ」

私には、只左様思はれてならないのだつた。

私は京を離れたのは九つの夏、汽車の窓から知人が贈つてくれた大きな枇杷の籠を覚えて居る。

其籠によりかゝり乍ら、汽車が逢坂山のトンネルを越すまで泣いて、泣いて居た。

春にも秋にも、折々に、京はたのしみの深いところだつた。

花のまだ咲かぬ頃から嵐山行の話しを宵々に、くり返して、明日はお花見と云ふ前日は、家中の人が煮べこしらへに忙しさうだつた。

親しい家のものなど誘ひ合して、朝早くから女はおもい重詰を提げて歩けば、男連は、一足さきに瓢箪を肩にさけてゆらくと歩いた。

嵐山の渡月橋のほとり、崖にそふた掛茶屋で、思ひ／＼に持つて來たお辨當のとりやりなどして居れば、「はたのおば」が「何とか買ふておくれや

はんか」と五月蠅く押賣りに來る事もあつた。

歸りは御室あたりに休んで、生醉に追ひかけられたところわがる人達、祇園の夜櫻を見にまわる頃はもう皆縮の様に疲れて居るのだつたが。

夏は河原の夕涼み、ピラ／＼した硝子すだれの中をくぐつて「金時」をたべるのがどんなにたのしみだつたらう。河原にうつる紅提灯の火もなつかしいものに忘れられない。

更にまた、秋は、南禪寺、永觀堂あたり、通天橋は乞食が居るのでいやだつたが、遠く高尾に紅葉をたづねれば「いろはもみぢ」「手ならひもみぢ」と數へて「手の上りますように」丁度數のよい紅葉を、持つて行つた晒にたゞいてそめた打ばんの小づちの響も耳には消えない。

毎日學校に通ふにさへ、學校の前の松林の翠がこめて、秋は、榎やむくの實が甘く、あまく熱れては落ちた。

そんな楽しい住みなれた町を離れる私は、小供心に悲しかつた。

「またきつと來年行かして」

とせがんで、其約束をたのしみに、言葉使ひの荒々しい、東京の新らしい友達の中で、上方訛りをわらはれながら、怯ぢた様な月日を送つて居たが、その約束も果されないとしつた頃には、もう親しい友も出來た。

それからまあ、何年の月日が経つた事であらう。喜びや歎きが私の上にゆき交つて、いつか思ひ出の中に住む私といふものゝ姿は、うすれたのではないかと思はれたが、やはり幼い時に、深く強く、刻み込まれた印象はどうしてももう一度それを現實にたしかめて見たい希ひを捨てさせないものだといふ事を知つた。

一日の行程に車の上から素通りした京の町、それは私を決して、しつくり

とした追憶の中に浸らせては呉れなかつた。

「こんな筈はない。もつと私の忘れ得ぬところが、此町の一角に存在して居る筈だ」

左様思つた事は遂に、其秋、よい機会に再びそこに私の足を運ばせたのであつた。

東山の麓の名所や寺々は、私の古い記憶を物なつかしく蘇らして呉れるのに充分であつた。

智恩院の石段に、附屬全校の生徒が並んで腰をかけて寫眞をとるのが毎年の遠足の例であつたが、「こゝらあたりに腰かけて」と思ふあたりを踏んで見たら涙が眼にたまつた。

「こゝで轉ぶと三年の間に死ぬ」とおびやかされて居た清水の三年坂、よく願ひては轉ぶのが辭だつた私には、そこがどんなに不安なところであつ

たらう。そんな事を思ひ出し乍ら、今も同じ様に並んだ瀬戸物店を覗いて歩いた。

けれど、そんな追憶は、私にとつてまだ極く普通のものであつた。

生れて育つた家の近くを、一日そゞろあるきして、私は、まだ昔の通りになつて居る、家の門や玄關の式臺を見た。横手の格子戸の京都風に海老茶色に塗られて居るのがまほろしの様な記憶の中の、私が其處をくゞる刹那の姿と、結びつけてくれた。

其處から、其頃と少しもかはらぬ御苑内を抜けて、仙洞御所の横手に出た。大きな、大きな御門とおもつて居た御苑の出口の門は、今見れば小さなものであつた。

私は、此仙洞御所のぐるりの小さな流れの側で、流れに落ちてゆく榎の實

の行衛をうらめしく見送つた事も度々だつた。おゝ其流れ、今も夜に、日にさら／＼と音をたてゝ居る小さなながれよ。

私は只、無言で此流れに見入つた。

流れよ。なつかしい流れよ。

私は、いろ／＼の事を此無心の流れに語り度くなつた。

おまへと遊んで居た頃の私は、むくの實が何よりの執着だつた。何も考へる事なしにおまへと一所に走つて居た。

おまへは其時も今も、同じ氣持で同じ姿で流れて居るではないか。

私を覺えて居て呉れるか。

あの無心であつた子が、こうして今再びおまへの處に立つ時の私の心を、おまへでなければ知つて呉れない、私の本當のおもひを、わかってくれるかしら。

それは本當に、ふと見た夢の記憶の様な、おほろけなものを、しつかりと、九つの夏から其日まで持ちつゞけて居たのだつた。

其おほろけな夢の世界が、偶然に——本當にそれは偶然と云つた方が適當である——ハツキリと現實となつて現れたのである。

不思議な様な嬉しさ。

仰へ切る事の出來ない感激。

夢に見た世界は、又夢の中でなければ逢はれないと思つて居た。

其逢はれまじき世界が、どうしてハツキリと私の前に姿を見せてくれたのだらう。

私は其處にじつと立ちつくす自分を、今の私だと思ふ事がどうしても出來なかつた。

私の中に甦る「子供」の私其まゝであつた。

私は大きな聲で思はず云つた。

「此處で、こうして遊んで居たのよ」

私の感激した聲に驚いた子供は、

「そうを」

と、とほけた返辭をした。

他家の不幸

訃報を受け取つた時の私は只胸騰ぎがする。

親しい人や其家族の訃はもとより、それほど面識の人でなくても、私の心は痛められ、戦かせられる。

子を失つたといふ知らせの親の名を見る時、良人に先だたれた人の家族の名を見る時、それらは殊に、私の心を強く打つ。

長命した老親の永眠の知らせは、「お氣の毒だ」と思ひ乍ら、それは、仕方のない事だといふ様な氣がして、割合に平氣なのであるが。

近く良人を失つた知人に對して私は何といつたらよいかと云ふ言葉に苦しんだ。勿論左様いふ方の告別式に出るほどの勇氣を私は持たない。

其れと前後して又私は、久しく郷里で病んだ青年の計に接した。

ありし日の凛々しかつた姿を思ひ出すと、「死」の手がむざ／＼と其壯者を奪つて了つたといふ事が、どうしても信じられない程の事だつた。

弱いと云つて居る人、明日をも知れぬと臥床して居る老人、そんな人達が、死を恐れ乍ら、一日一日と、生きて世を過して居る間に前途春秋に富む身で、息を通はす事が出来なくなつて了ふといふ事が、私には果敢なさ以上の果敢なさを教へて已まない。

翌日、また都にある知人の一人息子、中學を終へて上の學校に入つた許りで病氣になり、遂に永眠したといふ知らせを受けとつて私はいたむ心を押へて悔みに行く道すがら、

「何故人間は、斯様して、いつ死ぬかわからない身を持ち乍ら、名譽だとか財産だとか、其他のあらゆる物質的の眩惑に心を悩まされるものだらうか」

と幾度か考へさせられた。

町にはめまぐるしく自動車や電車が走つて居る。

人々は忙しきうにあちこちと歩いて居る。

店窓は美しく夏の装を凝らして客の足を惹きとめようとして居る。

流行、最新のスタイル、現代的に、文化的に……。

都會の人の追つてゆかうとする都會好みは日に新で際限もない。

そして其間に、田舎の人は靜かに、凡てに超然として、父親の代からの田地を毎日毎日耕して食物を作り、單調な生活に倦む事を知らない。

落付といふものの片影さへない都會人に比して、それはどれほど羨ましい安定さだらうか。

彼等には焦燥がない。自分達の世界の他にめまぐるしい世界がどの様に展開されて居ようともそれ等の事には關係しないで、只自然の恵のうち

に、自ら作り、自ら食べてゆく。働くだけ働いて、子や孫の世話をして、自然の生を終へてゆく。

そこに、あくせくとしなければならぬ都の人と、どれだけの値打の差があるのだろうか。

どれほど活動の社會に日も足らずに活動を續けて居た處が、病魔が一度訪れたなら、自分の手で、自分の口に食物を運ぶ事すら覺束ないではないか。學問、藝術、事業、あらゆる事は只私達が安易と思つて居る唯一日の生活よりは、より力弱いものなのである。

私は生きて居る。

生きて電車に乗つて居る。

そして昨日まで生きて居た人が永遠に生きる力を失つた、大きな出來事の前に佇まされて居る「親」なる人を慰めやうとて足を運んで居る。

ほんやりと私は悔みの言葉を言ふ事は出來ない。

私は中學校を終へるまで我子を育てるといふ苦心をまづ勘定させられる。そして、上の學校に入つた時の喜び、病になつて休學した子を見る親の心配、さうした結果は何が酬ひられたか。

もがいてもあせつても、何處に大聲を立てて救ひを求めた處が見えもせぬ、聞えもせぬ。やがて小さな壺の中に納められる「死せる我子」の傍に、呆然とする親の姿を、私は今までのあたり見なければならぬのである。

其家の門を開ける私の胸は騒いだ。

父なる人の洋服姿に、顔を見ぬうちからまづ心を強く打たれたが悉く様子を物語られると涙が出て仕方がなかつた。

だが泣いて聞く私よりも泣かずに話す親の胸は煮られる様な辛さであらう。

外に出た時私の足は宙を歩く様だつた。

「愛するものとの別離の苦しみを思へば、凡ての争闘も不安も何であらう。それだのに人間はどうしてこんなに慙ばらなければならぬのか、寂しいからか、弱いからか、弱い人間が、何故互に扶け合はないで、憎み合ひ、反き合つて已れ許り強がらうとするのだらう。」

弱い、弱い人間の姿。

そんなものを私は新様した場合にあまりに鮮かに考へさせられる。他家の不幸、それは私にとつても、又堪へ難い苦しみである。

苦しんで居る人があるといふ事をハツキリ知らされる苦しみ、それを身内に強くチリ／＼と感ぜさせられる。

私は此一二年ことさらに葬式といふものに列した事はない。

夏の一日

× 日

「ウーマンカレント」の原稿を印刷屋へまはす日が迫つて居るので東京からTさんが取りに来て、今朝の汽車で歸京、これですつかり九月號が出来ると思ふとやう／＼少し氣が落ちついて、初めて、暢びりとした氣持で、海も眺められる。

此頃静かな日が続いて、毎日二つや三つ地曳網のかゝらぬ日はない。今日も地曳の旗が立つて、遠くに人寄せの笛を吹いて居るのが聞える。

沖の方が晴れて、アメリカ通ひの汽船がかなり早い速力で走つてゆくのが見える。ちつと其海を見て居ると、刻々に色が變つてゆく。

空と海との一碧を區切る砂丘のこなたの草原には牛が三匹許り、終日尾を振つて草を食べて居る。

仕事に疲れて、海を眺め、又眼を轉じて、此草原の牛の動作をみまもり、砂丘の下の川端に、チヨコレイト色のまる裸で遊ぶ里の子らの動くのを見て居ると、私の心には、何もわづらはしい刺戟がなくて、只ゴーツと云ふ波の音をボンヤリと聞いて居る許りである。

日でりが續いて、庭の南瓜はもう葉がしをれた様になつて居る。其中に三つ四つ、小さなのがころがつて居る。玉蜀黍は風が烈しいので木が育たずやつと針金堀の高さまでになつて、でも時々のおやつになる。瓜も茄子も砂地でよくも出來ないけれど、人参だけは少し元氣がよいので折々抜いてはサラダになる。

折角種を選んで送つたトマトが植えなれないためか木だけ僅に生えた

許りで今年トマトをいくらでも食べられると楽しんで居たのはむだになつた。そして、市——毎日早く少し先の四辻で開かれる野菜や反物の賣場——でみつけてみんな買ひ占めて、また出來たら皆持つて來て呉れと野菜賣の婆さんに豫約して來た。

隣り——と云つても一丁あまり島をあるいてゆきつく茅屋根の家——の子が豈過大きな皿を抱えて來る。

「大工さんが入つてゐるので、オコヂヤをこしらへたからお上りなさい」避暑客が來るので大工が家を手入して居るのだと云ふ。

土地では大工のために毎日おやつをこしらへて澤山出すのださうで、毎日其子は赤飯、お萩、ごもくと米を澤山つかつた手のかゝつたものを家にも持つて來る。

田舎風の味がおいしいと子供らはじめ皆でそれを楽しみに待つ様にな

つた。

「今日は何？」

長女があけて見て

「何、これ」

「ホウチヨ」秀ちやんといふ子が云ふ。

「庖丁？ 庖丁で切つたの？ 變なもの」

毎日ごもくの方がいゝなあ、などゝ勝手なことを云つたりして、それでもおなかが空いてると手にとる。

「大工さんいつまで居るの。いつまでも居た方が可い」

來た頃は毎日午前と午後ときまつて海へ出かけた子供らも少し倦きたと見えて、此頃は、時には、バステルを出したり下の子も眞似をして山や海を

眺め乍らクレオンを動かして居る——それから蓄音機が一しきり。

「あの舟、あんなに舟が歸つて來る」

「私は沖からかへる白帆の數に驚いて云つた。

「おさかなが捕れたのよ。あんなに澤山歸つて來たんですもの」

「買ひに行きませうか」

長女より少し年上のHさんが云ひ出す。

「行くわ」下の子が取りつく。

やがて三人の姿が丸木橋を渡つて砂丘の後ろにかくれる。

そんな時が私の本當の時間、讀むにしても書くにしても、氣の落ちついた、尊い時なのである。

女中が風呂を焚きつけて居る。

それがあつくなつた頃、少し疲れたような三人の影に土地の子の秀ちや

ん、政ちやんも一所に、風呂敷を提げて來る。

庖丁をといで待つて居る私に、

「ハネてこまつたのよ」

中から出たのは小さな鱈が一尾。

やがて、あらひと、鹽焼と、うしをが出來上る。

「遠くを歩いておなかよすいたでせう」

廣くとつた椽側の、テーブルの上で、少し強すぎる夕風に吹かれながら、暮れてゆく海と島をながめ乍ら間に合ふといふ許りの食器を並べて夕飯を食べて居ると、向ふの島に黒い人影がして、

「こんにちは」

經木の海水帽をかぶつた郵便屋さんが符籤のついた郵便物をドサリと椽側に置いてゆく。

此靜寂な生活に、待つて居るものは此のトボケた様な郵便屋の訪れ許りである。

急いで手紙の封を切る。新聞をひろげる。郵便の來た時だけ、私の心は一寸忙しいきもちに返される。

新 東 京 記

暫く都をよそにして、夏を涼しい海のはたで暮したのも、私には便利な、賑やかな、美しい東京の町といふものが、いつでも私を迎へて呉れるといふ心強さがあつたからだつた。

好きな好きな東京を少しの間われから避けて、不便な田舎に暮すのには、いろいろ理由があつたにしても、其中には、左様した氣持の轉換から、更にまた新らしい東京への執着を深めたい様な心がひそんで居た事は否定出来なかつた。

其憧憬の東京へ、用事を果しに一日歸つた私は三越、白木屋、丸善、アルスなど、買物や用達を済ませ、兩國から南總の濱邊の家へ立つたのが震災の前日

であつた。

私の久し振りで見えた東京は、過去何十年に建設された東京の最後の姿であつた。私の眼には、長く單調な漁村の景色に慣らされた後の銀座の通りや、大きな建物の印象があまりに深いためであらうか、災後半月を経て、再び帝都に足を踏み入れた時に、涙ぐましい戦きにふるへた。

あの日、私が最後に見た東京の街は、又東京としてのもとの姿の最後の日だつたのだ。廿時間を出でないで、またよく間に焦土と化してしまふものとは誰が豫想だにし得よう。街には勇ましいまでにめまぐるしく走る車が業務のためにと凡ての活動を續けて居た。人々は暑いと云ひ乍ら活氣づいて働いて居た。

其もとの町が一夜に消滅して、私の眼に映じさせられたのは、焼跡の惨た

る町に、こんどは田舎でも見られないやうな七厘一つ釜一つを白布で圍つた様な露店が、いくつと數へられない程並んで、ゆであづき、すいとん、牛めしと、客をよんで居る有様だつた。

人々は荒んで居た。町にはうるほひがなかつた。「只生きるだけ」左様した感じが私の身にひし／＼と迫つた。

人力の前に自然の暴威はあまりに暴虐だつた。かなり都會を享樂しようとして居た人たちさへ、今は只食べて生きてゆく許りになつた。人心は又、恐ろしくいぢけて居た。

けれども其頽廢の都の中に、誰が壓へつけようとしても、おさへつけられて了はない復興の氣分は、恐ろしい出来事の後に驚くべき力で働いて來た。

一日、一日と街の有様が變つた。人の心持も安定して來た。何にもめけない江戸つ子氣分は、濟んだ事はきつぱりと諦めて愚痴もうらみもなしに

新しく働き出さずには置かないのであつた。

新東京の建設は、舊東京の破壊の日に、夙く其緒を發して居ると云つても決して過言ではない。

中にも機を見る事に巧みな人は、時機に應じて必要な商賣をして、平素に見られない利を得た。大した資本もなしに、場所さへよければ一日に多くの商ひをする事が出來た。

地震焼、コノサイ軒、復興亭など、名をきくだけでもそんな店を出す人の氣の利いた心持をほゝゑましく感じる。

復興へ、復興へ、それは只單なる叫びでなくて、其聲以上に大きく事實となつて、日に實現されてゆく帝都の現状である。

泰西文明の急遽なる移入によつて、生のまゝに呑み下された在來の東京

は、外形に於ても、内容に於ても、たしかに畸形であつた。都會をよろこぶものにとつて、又都會の中のいまはしい弊害にどれほど惱まされたらう。

終始伴はない文明、内容のつりあはない文明、形式ばかりの都會人が、集合して繁榮を築いて居た東都の夢は一瞬の震動で根柢から覆されて了つた。初めて生れ出る文化は或は眞の文化であらう。婦人の自覺といふものが今、空論を離れて、實際にさしせまつて來た。

恐らく、東京の街の中に、惰眠に安逸を食つて居る女性は一人もないであらう。

生活の建てなほし、自分自身の改造、新らしい心の女性の力は、どこまで働いてゆかうとするのだらう。

新東京の建設は、實に男女協力の理想の實現である。

建物は男性の手で建てられ、街も男性の手で整理されてゆくけれど、中に働く人達の生活の根源をしっかりと安定にして充分の力を致させる事がどれだけ復興の根柢を形づくつてゆくであらう。

女性の内助は、將來全く意味が變つて來た。

凡ての人の熱誠が基きあけるであらう、新東京の文化に浴して、力のある藝術や、學問や、事業が美しい生命を續けてゆく事を私は本當に心から待ち設けて居る。

生活革新の機來る終

大正十二年十二月五日印
大正十二年十二月十日發
行 刷

生活革新の機來る
定價金壹圓八拾錢

著者 三宅やす子

發行者 東京市外日暮里谷中本拾八
佐藤三郎

印刷者 東京牛込早稲田鶴卷町四〇三
谷口熊之助

發兌
發賣

東京市外日暮里谷中本十八
振替口座東京四三八七番
東京市外日暮里谷中本十八
振替口座東京六四〇五九番

新 作
文 行 社

所 刷 印 口 灣
町 向 日 幸 團 石 小 市 京 東

岡本綺堂 半七捕物帳

好評 八版

第壹輯

容内

◇お文の魂 ◇石燈籠 ◇湯屋の
 二階の春の雪解 ◇猫騒動
 化師匠の筆屋の娘 ◇帯取の池
 朝顔屋敷 ◇勘平の死

四六判四百頁
 上製布装箱入

定價 貳圓廿錢
 送料 十二錢

好評 七版

第貳輯

容内

◇雪達磨 ◇山祝の夜 ◇津の國
 屋 ◇半鐘の怪 ◇辨天娘 ◇廣重
 と河瀬 ◇奥女中 ◇鷹のゆくへ

四六判三百五十頁
 上製布装箱入

定價 金貳圓
 送料 十二錢

忽ち 五版

第參輯

容内

◇半七先生 ◇化銀杏 ◇鬼娘 ◇
 少年少女の死 ◇雷歌と蛇 ◇狐
 と僧の寮 ◇旅繪師 ◇お照の父

四六判三百餘頁
 上製布装箱入

定價 金貳圓
 送料 十二錢

發兌

東京日暮里
 谷中本十八

振替東京四三八八七番
 振替長野三〇九三番

新 作 社

525
19

終

